

私ふうに言えば、具体時代にはその本質はどれにも見分けるほどの特色を発揮することがなく、それ以上に大阪という場所での、吉原治良という偉大な作家の連山現象とも呼ぶべき、目立たない、キワダタない存在であったというように解釈するより仕方がいが、AUというグループをして、10年たたずしてまたもや世界的要素をもつ、具体とは、つながっているがもう一段と強く大きくなった。芸術製造場所西宮市を築き上げたことが、嶋本先生の未来の力そのものを明確にしたと私には思える。こう嶋本先生をもち上げれば、仲間の名前が消えないどころか、嶋本先生の運動の最大の強みはともに一緒にやっていける不思議な寛大な、いままで鋭く激しく若さと異才をぶっつけあった前衛運動とは縁遠いものである。

あっさりいって私の周辺はいつも喧嘩がみちみちている。事実、私は沢山の人々と喧嘩してきた。しかし、嶋本先生にはまったくそれがない。いい意味でのそれは学園である。ともに楽しく、ともに勉強する雰囲気なのである。いつ嶋本先生とお逢いしても論争でなく冗談があり、笑いがあり、家庭的で皆が先生を信頼した雰囲気の中でやっていることは世界規模のできごとである。

ここで誤解のないように言っておきましょう。1986年のポンピドウの日本の前衛が、嶋本先生は頭にしたメッセージで一躍、現役の前衛作家であることを証明した。確かにポンピドウでの彼の存在は唯一の参加中、現役であることを証明したもので、ポンピドウと言えば、それは相当の名前のバリュウムのある有名美術館である。にもかかわらず嶋本先生はパリ市内の、そう立派ではない、心ゆくまで前衛活動のできる嶋本先生の個展会場で私達観客を前に「フランスの文化相がポンピドウに招待されたことは作家にとって最高の誇りであろうといったが、それも誇りには違いありませんが、私は、こうしてメールアートの皆さま、前衛作家の方、そして友人の、こうして私の個展に来て下さったこの集まりこそが最も私の誇りというものです」と挨拶した。私の目からみても、それは正しいように思われる。

即ちポンピドウは確かに光栄である。しかし、芸術は光栄のためにあるのではなく、個人の画家の、ハプナーの仲間の、その運動のやむなく、あるいは偶然の、自然の中に存するものであって、誰がなんといおうとポンピドウの中からの出発はあり得ないのである。その出発は小さくとも嶋本先生の頭から出発しなくてはならないもので、その出発こそが世界中にメールアートの網がはりめぐらされる結果を生む原動力なのである。意外と、この判りきった捉が読めず、一生その、いわゆるポンピドウの周囲を駆けめぐって必死で芸術の中心にたどりつき得ない作家と書いて、それもまたいいではないかと考える年頃に私はなってしまったのである。